

Report on the Villages in North China (9): The Shanxi Province Villages in August 2014

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41431

華北農村訪問調査報告(9)

—— 2014年 8 月，山西省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、現宇都宮大学特任教授の内山雅生を研究代表者とする科学研究費・基盤研究(A(海外学術調査)¹⁾の研究分担者として、これまで山西省の農村において聞き取り調査に参加してきた²⁾。そして、2014年度はその最終年度となっていた。ところが、今年度は、これまで主要な聞き取り対象農村だった山西省P県D村における聞き取り調査を実施することができなくなった。その主たる理由は、同村書記が不正問題で批判・事情聴取を受けているためである³⁾。

今回は、2014年 8 月11日～24日の日程で、8 月11日に成田から北京へ、翌12日に北京から山西省太原へ移動し、山西省内の五台山や太原市近郊の晋祠鎮赤橋村などを参観し、また、山西省の東北部(D県)や中部(H市・H県・L県など)の農村を訪問して農村の幹部や老幹部に聞き取りを行った。

今回、山西省東北部の農村(D県J郷Y荘)を訪問したのは、日本側が内山雅生・弁納才一・田中比呂志・古泉達矢・河野正・佐藤淳平・前野清太郎(年齢順)の7人で、山西大学側は孫登洲・張漲明(年齢順)の2人で、一方、山西省中部の農村(H市Y村、H県Q村、L県G村)を訪問したのは、日本側は内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・河野正・佐藤淳平・前野清太郎(年齢順)の8人で、山西大学側は毛来靈・常利兵・孫登洲・張漲明(年齢順)の4名である。とりわけ、L県G村では同行者の毛来靈(L県出身)の事前準備によって6人の老人に来ていただき、我々は5つのグループに分かれて話

を聞くことができた。

なお、本稿においても、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として敬称を略すとともに算用数字と常用漢字を用いることにした。また、これまでに聞き取り調査を行ってきた山西省P県D村の場合と同様に、プライバシーの保護の観点から、聞き取り調査を行った農村については、原則として団体名・組織名・機関名・地名・人名などの固有名詞を伏せることにした。

I 山西省農村訪問地

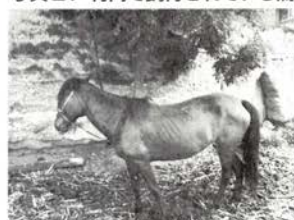
(1) D県J郷Y荘

8月13日午前、山西大学のSDZの妻であるXLXの実家であるD県J郷Y荘を訪問した。同村内では飼育されている多くの羊や馬を見かけた(写真1・写真2を参照)。そのためであろうか、本村内には畜糞の臭いが立ち込めていた。

写真1. 村内で飼育されている羊



写真2. 村内で飼育されている馬



本村内の道路は全て舗装されており、各農家の邸宅の外壁は比較的高く、立派な門が多い(写真3を参照)。まずSDZの妻XLXの父親であるXXNにX家の族譜を見せていただいた。それは、X氏のある人物が作成・出版したものを購入したという。

そして、今回の参加者全員で村書記及び村長(写真4・写真5を参照)に本村の概況などについて話を聞き、ついで、しばらくすると、2人の老人(XJX, XGC)が現れたので、2つのグループに分かれて話を聞いた。

写真3. 新築された邸宅



写真4. (左側から)村書記・内山雅生・XJX



写真5. (左側から)村長・内山雅生・XJX



聞き取り日時：2014年8月13日(水) 10:30～11:40

聞き取り場所：XXN(SDZの妻XLXの父親)宅

聞き取り対象者：CGM(村書記, 辰年生れ, 62歳)・

XZW(村長, 亥年生れ, 44歳)

聞き手：内山雅生・弁納才一・田中比呂志・古泉達矢・河野正・
佐藤淳平・前野清太郎・孫登洲

通訳：張漲明・徐麗霞

村の概況

・同村は約400年前に始まり、もともとはY荘と呼ばれていたが、近隣のN郷にもY荘があり(郵便物の配達などで混乱が生じたりしていた)、Y姓が多かったのに対して同村にはY姓は少なかった(2014年現在、Y姓はも

ともと村外からやって来た2戸にすぎない)ので、1976年頃D県政府の命令を受けて現在のY荘に村名を変更した。なお、N郷のY荘は、20～30年前に山西省副省長をやっていたYWHの出身地でもあるという。

- ・CGMは、党支部の同村書記を30年間やっている。また、村民委員会は、選挙で選出された3年任期の村長・副村長2人・村民委員会委員2人と彼らによって指名される会計1人・婦女聯主任1人からなり、現婦女聯主任は村外から嫁いできた女性が務めている。今年は、任期3年目なので、次期村長選挙が行われる。
- ・2014年現在、本村の総戸数は817戸おり、総人口は2,215人で、そのうちX姓が約1,800人いる。本村内よりもD県内とりわけJ郷内から嫁して来た女性が多い。自由恋愛ではなく、紹介による結婚が多い。
- ・本村の全耕地面積は5,768畝で、そのうち約4,700畝に玉蜀黍が作付られており、冬の作付作物は全くない。井戸水で灌漑した耕地では、玉蜀黍は1畝当たり600～700斤の収穫がある。
- ・冬季の出稼ぎとしては、D県内における鑄造業(本村内にも3つの鑄造工場がある)、各地の都市における建築業や外食産業(コックや皿洗いなど)に従事する者が多い。また、30～50歳代の女性がベビーシッターをやっており、内モンゴルで働いている人もいる。
- ・解放前は、棉花・水稻も栽培しており、女性が自家消費用として糸を紡ぎ(土糸)、布を織っていた(土布)が、現在、紡織機は残っていない。

村の廟と廟会

- ・本村内には清朝期に建てられた3つの廟がある。すなわち、旧暦2月19日に廟会が行われる観音廟(話を聞いていたXXN宅のすぐ近くにあった。写真6を参照)、旧暦3月7日に廟会が行われる皇姑廟、旧暦5月13日に廟会が行われる老爺廟である。
- ・廟会では、「趕集」(市場)ができ、芝居が上演された。芝居は「糾首」が取り仕切って村民からお金を徴収して劇団を呼び寄せていた。糾首は1年ごとに5～6人が輪番制で務めた。
- ・現在のところ、本村内にはキリスト教信者は1人もいない。

写真6. Y荘の観音廟(田中比呂志撮影)



水利と灌漑

- ・ 4～5年前に深さ約100mの井戸が掘られ、ポンプで水を汲み上げるようになった。井戸・ポンプの整備によって、5年前までほとんど耕作できなかった土地で玉蜀黍・向日葵などを栽培できるようになった。井戸は本村(生産隊か生産大隊)の共同所有であり、井戸を請け負っている者に水を汲み上げる際にお金を支払っている。現在、井戸はほぼ足りているが、さらにあと2つあればなおよい。なお、以前は、本村の南側を流れている滹沱河から水を引いて灌漑していた。
- ・ かつて洪水が発生した時は、本村から治水工事に行く人もいたが、あまり役に立たなかった。そこで、本村の幹部が指導して治水工事を行った。

写真7. XGC

聞き取り日時：2014年8月13日(水) 11:40～12:20

聞き取り場所：XXN(SDZの妻XLXの父親)宅

聞き取り対象者：XGC(写真7を参照)

聞き手：弁納才一・古泉達矢・佐藤淳平・
前野清太郎

通訳：張漲明・徐麗霞



XGCの個人史

- ・申年生まれで、今年、83歳である。
- ・解放前は、20畝余りの耕地(あまり良い土地ではなかった)を所有する「下中農」(6人家族)で、玉蜀黍や高粱を栽培していたが、食糧が不足していたので、短工として雇われていた地主から無利子で不足分の食糧を借りていた。また、豚1匹・鶏5～6羽・羊2～3頭を飼育していたが、全て自給用で、全く販売することはなかった。
- ・1937年(?)、日本軍が本村に砲弾を打ったので、異臭がしたのを憶えている。1941年には日本軍が郷に砲台を作った。1945年以前に八路軍(遊撃隊)がしばしば本村に来ていた。
- ・1945年秋、同村の近くの智村にいた閩錫山軍が本村にもやって来たが、1949年には八路軍がやって来た。
- ・1949年以前、李城など近隣の2つの村ではアヘンがよく栽培されていた。そして、本村でもわずかながらアヘンが栽培されていて、アヘン「1片」(＝2銭＝0.2両)と玉蜀黍3斤が交換されていた。1949年、解放軍が本村にやって来てからアヘンは栽培されなくなった。
- ・互助組に参加したが、1年もしないうちになくなってしまった。それは、互助組が「大鍋飯」のようだったので、みんな不満を持っていたからである。
- ・1955年、初級合作社に参加して、その2年後には高級合作社となった。1958年から生産隊(約200人)の小隊長となった。
- ・1960年から食糧不足が深刻になり、1961年が最もひどかったが、同村では餓死者は出なかった。当時は、「苦菜」や川の浮草までも食べた。遠くは山東省・河南省・安徽省から、また、近くは近隣の龍湾・虎山などの村から食糧を求めて同村に流入して来て、廟の中に住み込む者もあり、少しは食べ物あげたが、同村にも食べるものがなかったので、しばらくすると、彼らは村から出て行った。

(2) H市T郷Y村

聞き取り日時：8月17日(日) 9:35～11:00

聞き取り場所：WBH(Y村の社首)宅

聞き取り対象者：YXP(写真8を参照)

聞き手：弁納才一・古泉達矢・

張漲明・佐藤淳平

通訳：毛来靈

写真8. YXP(左側)と筆者



個人史

- ・1958年3月29日(旧暦)に生れ(戌年生れ)、現在、58歳になった。
- ・7歳、Y小学に入学して5年間学び、L家荘中学で3年間学び、N高中で3年間学んだ後、本村に戻ってきた。
- ・本村に戻ってからは、第4生産小隊(約30戸・約150人)に属し、Y生産大隊(4つの生産小隊からなる)のY加工廠(粉条・酢などを製造する食品加工工場)で働いたが、労働点数は1日で12分(0.24元)にすぎず、夫婦2人の「口糧」にも不足するほどだったため、よく食糧を借りた。なお、粉条の原料は玉蜀黍と緑豆で、酢の原料は高粱と麦麴だった。
- ・豚を1匹飼育すると、Y生産大隊から0.25畝の自留地を支給され、その自留地は文革中も持ち続けることができた。当時は、食糧が不足していたので、自留地には自家消費用の玉蜀黍を栽培した。豚の飼育はその糞を肥料として利用することが主な目的だった。

家族史

- ・父(YSC)は、巳年生まれで、約20年前に65歳で亡くなった。土地改革時は、約20畝の土地を所有する「貧農」で、文革直前まで第4生産小隊の隊長で、1日の労働点数は0.8元だった。また、父は3人兄弟の長男だった。
- ・父の約3歳年下の弟(YZC)は、師範学校を卒業し、N村小学の教師をしていた。孔澗で古文書(四社五村の「水規」に関する文書)を「社」が支出した50円で購入して清書した。生前、北京師範大学董曉平から聞き取り調査を受けた。また、妻(WYJ)はY荘の出身で、実家は農家だった。

- ・父の一番下の弟(YSH)は、父より約6歳年下で、小学校も卒業しなかったが、独学し、生産大隊で会計を務め、農業に従事している。その妻(WFE)は、G村の出身(実家は農家)で、1歳年下だった。
- ・母(HSS)は、父より1歳年下の本村人で、約10年前に79歳で死去した。
- ・7人の兄弟姉妹である。8歳年上の長男(YGF)は39歳で死去し、その妻(XLM, 64歳)はXの出身である。6歳年上の次男(YGQ)は49歳で死去し、その妻(ZXE)はX鎮B村の出身である。2歳年上の三男(YYP)は60歳で、その妻(LBZ, 59歳)は本村人である。四男(本人)の妻(CGH, 1歳年下)も本村人である。五男(YGL)は子年生まれの54歳で、その妻(? [姓は不詳]X, 52歳)はCの出身である。長女(YAZ, 56歳)はS村のYSX(58歳)に嫁した。次女(YHZ, 51歳)は離婚して本村に戻って来ている。

四社五村の水の使用権

- ・かつては水をめぐる争いで多数の死傷者が出たので、それぞれの村の間で話し合いをして、水の使用について取り決めるようになったと老人から伝え聞いている。そして、仮に、取り決めに違反した者を殺しても、法的な処罰を受けることはなかったという。
- ・1か月において水を使用する権利がある日数は、元々は7日間ずつだったが、協議を通して、C(H県)が8日、J(T郷)が7日、Yが5日、Xが4日、Kが2日となった。四社五村のうち、Kは最も水が不足しており、かつてY村からKに嫁いできた娘が2日分の水の使用権もいっしょに持ってきたという言い伝えがあるという。
- ・村同士での水の貸し借りに関して、本村には「有借有還再借不難」「有借無還再借不難」という言い伝えがある。すなわち、水を借りたからといって必ずしも返さなくてもよいという意味である。

雨乞い

- ・文革中、雨乞いの儀式(村内を村民が練り歩く)は禁止されていたが、本村では干ばつの時に密に行われていた。最近では、文革終結直後の旧暦5月(高校生の時)に雨乞いの儀式が行われ、参加した。

(3) H県X郷Q村

GSH(村長)宅は、本村のほぼ中心地にあり、かつて家の裏に飲用の貯水池があったが、現在は埋めてなくなったという。

1) GSH

聞き取り日時：8月17日(日) 13:55～14:30

聞き取り場所：GSH宅

聞き手：内山雅生・弁納才一・田中比呂志・古泉達矢・前野清太郎

記録者：前野清太郎

通訳：祁建民

個人史

- ・1967年生まれで、小学校を卒業した後、本村で農業をやってきた。長らく社首を務めてきたが、2009年からは副村長となり、さらに、2012年から村民委员会主任(村長)を務めている。

村の概況

- ・本村は、総戸数が383戸で、総人口が約1,150人おり、国土資源局の資金によって深さ170～280mの井戸が6つ作られ(1992年に3つ、2010年に3つ)、ポンプで吸水している。ただし、現在、5つの井戸しか使われていない。
- ・本村内には2か所の貯水池があり、かつてはそこまで飲用水や洗濯用水を汲みに行った(使用量に制限は無かったが、灌漑用には使うことは許されていなかった)が、現在は埋めてなくなった。現在、磁器の水道管(一部が故障している)と各家庭の庭にある井戸とがつながっていて、生活用水として使用している。
- ・四社五村には十数名の社首がおり、その中には4人の「片長」(かつての生産大隊規模)が含まれている。社首は大祭・小祭に参加するが、最近ではほとんど義旺村に集まるようになってきている。現在、劇団を呼ぶこともなく、芝居はなくなった。

- ・C社(Q村, Q村)の水の使用権は8日間で、Q村とQ村が各々4日間となっており、水の使用料(実質的にはメンテナンス料)として村民から徴収している。本村の徴収額は、一昨年在約5,000元だったが、今年は約500元だった。なお、最新の地図帳ではQ村とQ村は見当たらず、両村の地域はC村となっている。
- ・本村では、現在、主に玉蜀黍・小麦の他に、葱・トマト・インゲン豆などの蔬菜が栽培されている。本村と橋西村との間では、1988年まで小麦の収穫期に「換工」が行われていたが、その後、コンバインで収穫するようになったので、「換工」は行われなくなった。
- ・河南省や山西省内の汾陽・臨汾などから「菜販子」が車(トラック)で本村に蔬菜を買付にやって来る。「菜販子」から連絡を受けた現在の村長(「菜販子」とは村長になる前からの知り合いである)が村民に通知して現村長宅の庭先で蔬菜を計量して買付け、「菜販子」は村長に対して「信息費」として1斤につき1分銭(前野清太郎の記録によれば、50kgで1元)を支払う。
- ・このように、最近、販売することを目的とする蔬菜の栽培が盛んになったので(村長宅ではトマトが出荷準備中だった)、村外へ出稼ぎに出る者が以前よりも少なくなってきたという。

2) MAG

聞き取り日時：8月17日(日) 14:35～15:10

聞き取り場所：GSH宅

聞き手：内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・前野清太郎

記録者：前野清太郎

通訳：張漲明

個人史

- ・張漲明の親戚であるということから、張漲明がMAGを急遽呼び寄せて話を聞くことになった。
- ・1944年(申年)生れで、Q村の小学校で6年間学び、G(本村から約4km離れている)の中学校で3年間学んだ。中学校を卒業した後(1965～68年)、

入隊していたが、除隊後(1968年)、本村に戻り、H県文化館に務め、1976年には沁水下川中石器遺跡の発掘に従事し、1984年からはH県博物館長(H県文化館から分離)となった。

- ・退職後、本村に戻ってきってから10年になる。最後に、本村の幹部は「水平」(文化水準)が低いときりにこぼしていた。

父親

- ・父(MQD)は、かつて本村の三官廟の中にあった小学校で学び、1936年に本村に「八路軍」(共産党軍?)がやってきて、1938年に共産黨員になった。そして、かつては10畝ほどの土地を所有していたが、「四川」で県長(12級の高級幹部)になった頃には土地はなかった。

宗教

- ・本村には三官廟があり、天官・地官・水官の三官を祀っていたが、文革中に破壊された。近年、修築された。
- ・改革開放以降、本村にもキリスト教徒が現れ、現在、20~30戸が信者となっているのではないかと。キリスト教徒になるのは、大部分が若い人で、老幹部で信者になった者はいない。

(4) L県N鎮G村

聞き取り日時：8月18日(月) 9:35~11:15

聞き取り場所：G小学校3階

聞き取り対象者：LFH(写真9を参照)

聞き取り同席者：LZQ(村会計)・HZZ(村副書記、

午年生まれ、61歳)

聞き手：弁納才一・毛来霊

通訳：毛来霊

写真9. LFH



個人史

- ・申年生まれで、今年で95歳になった。

- ・10歳、G小学に入学し、3～4年間学んだ。
- ・14歳頃から、農業に従事した。所有していた8畝の灌漑地には主に小麦(冬作物)と玉蜀黍(夏作物)を栽培し、大根・人参などの蔬菜や棉花も少し栽培したが、基本的には自家消費に当てられた。また、驢馬1頭(主に自家消費用の石炭を運搬)・豚1匹・鶏10羽を飼育していた。畜糞が重要な肥料となった。卵も自家消費され、販売されることはなかった。
- ・日中戦争前の閩錫山時代には、政府の命令で、双池鎮へ「公糧」(玉蜀黍)を0.8円で売りに行ったが、それを運搬するために借りた驢馬1頭の借り賃は1元だったので、0.2元の赤字となった。なお、当時は、豚肉1斤が0.1元、小麦粉1斤が0.03元にすぎなかった。
- ・旧暦1938年1月27日(18歳)、日本軍が本村にやって来た。日本軍が本村に「当差」を命じたので、Fの「42工廠」(同工場の中には8つの課があり、日本兵もいた)で炊事係りの補助として無給で4か月ほど働いた(料理は日本人が作っていた)。日本兵(岩手県出身者)は大量の缶詰とともにジャポニカ米を持参していたが、後には中国東北部の米(当初の米より美味しくない)を食べるようになった。食堂で日本人と一緒に食事をとった。また、年齢が同じくらいの若い日本兵とはよくけんかしたり、筆談で会話したりしたが(今でも片言の日本語を憶えている)、その若い日本兵の中には故郷を思って泣いている者もいた。そして、ある日、日本兵(小隊長)よりも先に風呂を使つて殴られたので、本村に戻ってきた。
- ・1948年、本村が解放されると、本村に戻ってきて、県政府の指名によって本村の幹部(副村長)となったが、村長(「貧農」)とともに無給だった。
- ・1949年から、L県人民委員会代表(無給)となり、同県の会議にも出席した。当時の同県長(LC)の秘書(HL)はよく本村に来ていたので、仲が良かった。

家族

- ・父(LCD)は、3人兄弟だったが、2人の弟は子供のいなかった親戚の家に養子に出されたので、8畝の土地を単独で相続した。農業だけでは暮らしていけなかった所以、短工として働いた。手当は、1日につき玉蜀

黍を4～5斤(0.1元に相当)もらえた。一方、母については、名前は知らないが、本村から約30里離れた三教の出身で、子供の頃はよく遊びに行った。母は自作棉花で自家消費用の粗布(土布)を織っていた。当時の女性は誰でも紡織ができた。

- ・20歳で結婚した。妻(YYL)は、本村から約20里離れたDの出身で、紡織ができたが、1949年からは糧票ばかりでなく「布票」も配給されたので、紡織をしなくなり、紡織機もなくなってしまった。
- ・現在、孫(LYJ、巳年生れ、38歳)が本村の村長を務めている。

3 年困難時期

- ・やはり1961年が最もひどかったが、本村では餓死者は出なかった。当時は、榆や柳の葉まで食べたが、よく中毒を起こした。
- ・1959～61年、本村では農業生産物の収穫量が特に減少したわけではなかったが、ソ連から武器を購入する資金調達のために、政府が農村から農産物を大量に徴収したことによって、農村で深刻な食糧不足が発生したという。
- ・当時は、河南省から多くの流民が本村に流入してきた。河南省から本村に嫁していた女性がいたことと関係があったかどうかは不明である。

解放前の状況

- ・本村では、商業に従事する人は少なかった。短工が多くいたが、その多くは農繁期に洪洞県内の農村に出かけて農作業に従事する者だった。短工の手当は1日で1斗(14斤)の小麦で支払われた。
- ・本村には地主は1戸もおらず、40畝の土地を所有する「富農」が1戸いただけで、長工や短工を雇用していた。

解放後の状況

- ・1950年に靳という名字の工作隊員が1人(L県東部の人)やって来て、貧農を中心として農会を組織し、土地改革を実施したが、富農の土地(40畝)を2畝のみを残して没収した。

・1953年に互助組が組織され、1954年には初級合作社(本村には1社のみ)が組織された。1958年には、H村とともに高級合作社を組織した。人民公社時代は、本村全体が1つの生産大隊(蔬菜作りが中心)を形成し、3つの生産小隊から成り立っていた。1日の労働点数は10分で、山間部の方よりも多かった。

II 山西省訪問地

(1) D県J郷Y荘・五台县五台山

8月13日(水)午前中、上述のように、D県J郷Y荘で村書記・村長・老人に話を聞き、村書記の家でやや遅めの昼食を御馳走になった(写真10・写真11を参照)。出された料理の味は、我々日本人に配慮してくれたのか、全て脂っこくなく、あっさりとしていた。その後、宿泊先である五台山風景区の中にある5つ星ホテルの五峰賓館に向かった(写真12を参照)。同ホテルの宿泊客はほとんど全てが中国人で、外国人は我々以外にはみかけることはなかった。また、同ホテルの朝食・昼食・夕食は3食ともにほとんど同じメニューだったが、味付けはやはりあっさりしていた。

写真10. 村書記宅の宴会場



写真11. 宴席の料理



8月14日(木)午前、五台山にある多くの寺院を参観した。そのうち、最も著名なのが大塔院寺である(写真13を参照)。五台山全体がかなり観光地化されているという印象を強く受けた。

写真12. 五峰賓館



写真13. 五台山大塔院寺



(2) 閻錫山旧居

8月15日(金)午前、D県河辺鎮河辺村にある閻錫山旧居を訪問した。広い敷地に建つ大邸宅であり、外敵の襲撃に備えて邸宅の外へと通じる地下トンネルが掘られていた。なお、2014年現在は、河辺民俗館・閻錫山旧居文物館となっている(写真14・写真15を参照)。

写真14. 閻錫山旧居



写真15. 閻錫山旧居の碑



(3) H県

8月16日(土)、H県大槐樹を数年ぶりに参観した(写真16を参照)。H県は今回初めて山西省農村聞き取り調査に参加した張漲明の故郷である。前回、参観した際にすでに始まっていた工事は完了し、全体がテーマパークのように

っており、様々なオブジェやレプリカに観光客の人气が集中しており、「古大槐樹」(初代大槐樹)を訪問する人は少なくなっていた。その後、広勝寺にも再訪したが、途中、激しい雨に見舞われた。

写真16. H県大槐樹



(4) H市Y村

8月17日(日)、四社五村の1つのY村を訪問し、社首のWBHや老幹部に話を聞いた(写真17を参照)。

写真17. Y村のYXPとWBH(右側)



(5) 赤橋村

8月20日(水)午前、まず赤橋村の大仏閣(禅宗)・竜王殿を参観した(写真18を参照)。我々が到着する前に、本殿の前にはスイカやミネラルウォーターを用意したテーブルがセッティングしてあった(写真19を参照)。そして、2人の僧侶が我々の訪問を歓迎するために読経をしてくれた。そのうちの1人は五台山からやってきたという。なお、いくつかの寺院が建造中だった。

写真18. 赤橋村の大仏閣・竜王殿前における集合写真



写真19. 歓迎のためのテーブル



おわりに

山西省の農村における聞き取り調査は、予備的調査を行った3年間に本格的調査を実施した科研費・基盤研究(A)(海外学術調査)の採択期間の4年間を加えると、実に7年間(2007年～2014年)の長きにわたったが、全て山西大学中国社会史研究中心の全面的な協力と支援によって順調に実施され、大きな成果を上げることができた。ここに、改めて行龍氏をはじめとする山西大学中国社会史研究中心の諸先生方には衷心より感謝を申し上げたい。

今回は、山西省P県D村では聞き取り調査ができなかったが、その他の農村では想定以上に多くの話を聞くことができた。その成果は、本稿の他にも祁建民・田中比呂志・河野正などによってまとめられることになっている⁴⁾。

今回の調査で山西大学中国社会史研究中心との共同研究はひとまず終了するが、今後は個人的な学術交流は継続することを確認している。また、これまでの山西省の農村における聞き取り調査の経験と蓄積・成果は、筆者が研究代表者を務める科学研究費・基盤研究(B)(海外学術調査)に継承されることになっている⁵⁾。

なお、今回の訪問地のうち、Q村において生じている変化は非常に興味深かった。すなわち、これまで我々は都市近郊農村における脱農化の進行を多く見てきたが、都市から遠く離れた僻地農村の1つである橋東村では、従来、都市部へ蔬菜などを供給してきた都市近郊農村が脱農化したために、自給自足の農業から商業的農業が展開するようになったのである。

注

- 1) 科学研究費・基盤研究(A)(海外学術調査)2010年度～2014年度「近現代中国農村環境がバナンスと伝統社会に関する史的研究」(研究代表者：内山雅生)。
- 2) 筆者・祁建民・田中比呂志などがそれぞれ中心となって、山西省農村におけるこれまでの調査内容をまとめたものとして、以下のものがある。
 - ①拙稿「華北農村訪問調査報告(1)～2007年12月、山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)～2008年12月、山西省太原市・霍州市・平遙県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号、2010

年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第34巻第1号, 2013年12月)。

- ②三谷孝・内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号, 2010年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(2)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第12号, 2011年12月), 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第13号, 2012年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(4)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第14号, 2013年12月)。

- ③田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第62集, 2011年1月), 河野正・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(2)－2010年8月・12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第63集, 2012年1月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(3)－2011年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月), 福土由紀・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(4)－2012年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月), 田中比呂志・孫登洲・古泉達矢「華北農村訪問調査報告(5)－2013年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第65集, 2014年1月)がある。

- ④河野正「華北農村調査の記録－2013年8月, 山西省P県D村の聞き取り記録－」(『東洋文化研究』第16号, 2014年3月)。

また, 山西大学中国社会史研究センター側の調査内容をまとめたものとしては, 行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎(介納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月, P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(2)－2010年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第63集, 2012年1月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(3)－2011年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月)を参照されたい。

- 3) 山西大学側の説明によれば, 山西省では幹部の汚職・腐敗一掃を目指す「整風運動」は終結に近づいているという。
- 4) 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(5)」(長崎県立大学国際情報学部『研究

紀要』第15号, 2014年12月刊行予定), 河野正・前野清太郎・内山雅生・田中比呂志・古泉達矢「華北農村訪問調査報告⑥」-2013年8月・2014年8月, 山西省L県G村・D県Y村」(『東京学芸大学紀要(人文社会科学系II)』第66集, 2015年1月予定), 河野正・前野清太郎・佐藤淳平「華北農村調査の記録-2014年8月, 山西省L県G村の聞き取り記録-」(『学習院国際研究教育機構研究年報』創刊号, 2014年12月刊行予定)。

- 5) 科学研究費・基盤研究(B)(海外学術調査)2013年度-2017年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者: 弁納才一)。